
憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

【NZコード】

N6982D

【作者名】

「つ」

【あらすじ】

街角で、その少女は泣いていた……。出会った少年は、夢への入り口か。ルーフェイアとイマド、2人の出会いの物語 「無情という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 「戦いの果てに」の4年前、シリーズの冒頭になります。前作に比べると穏やかです 元7桁サイト掲載、シリーズの改訂版第2弾です 携帯版は、1行毎に改行のレイアウトです

Episode : 01 街角

かのシホラ学院の危機より遡る」と「四年」。
アフガン領内にある国境の町、ルアノンにて……。

Hamad

「四ヶ用ぶり……か?」

毎過ぎのキツい日差しを手のひらで遮りながら、俺はつぶやいた。

「これはアフガンとローディスティオとの境にある、国境の町だ。長距離線のアフガン駅から南、バルディオン渓谷の近くにある。
そこへ俺、学院の夏季休暇を利用して遊びに来たところだつた。
俺の両親とうの昔に両方死んでるけど、この町には親父の弟
よつは俺の叔父　がいる。この叔父さん息子がないせいか、俺
のことを可愛がってくれてた。

「さて、どうすつかな?」

まっすぐ叔父さんの家へ行つてもいいけど、「夕方に着く」つて
連絡しちまつたから、あんまりいと悪いだろ?。

だいいちあの家は開業医だから、真っ昼間に行つても邪魔なだけ
だ。

ホントのこと、時刻表見間違えてただけだつたりするナ
ビ。

ひとつこしても時間は余りまくつてた。

駅のホーム　　どゆわけか町外れにある　　で、少し考え込む。

「…………歩いてくか」

「…………から叔父さんの家まではけつこうあるけど、まあ歩けねえ距

離じやない。どうせ時間はあんだから、たまにはいいだろ？

荷物を持ちなおして、俺は歩き出した。

街並みはほとんど変わってなかつた。ただ前はまだ冬っぽい時期
だつたから、人の服装や華やかさがまったく違う。

個人的にはこのほうがいいんだよな。寒いの苦手だし。

俺、この町好きだ。

首都のアヴァンシティを思わせる、重厚で華やかな石造りの町。
いちおう交通の要所に近いし、周囲の自然を観光に来る人も多いか
ら、辺境の割には人の出入りも多い。

けど俺がこの町を好きなのは、そういう理由じやない。何度も戦
火に巻き込まれてゐるのに、そのたんびに昔の姿で復興を続けてきて
るつてことだ。

だからなんだろうけど、この町見ると、人間つてなんでも出来
そうな気がしてくる。

どつちにしてもけつこつ来てる町だ。慣れた道をときどき店先の
ぞきながら、ぶらぶら歩いてく。

ネミのやつになんか、お土産でも持つてくかな？
でもあいつそろそろ四つになるから、前みたいに適当なもの買つ
つても喜ばねえかも。

そんなことを考えながら歩いて俺、思わず立ち止まつた。
通りの向こうに、ひとり女子がいるんだけど……。

なんか、むちゅくちゅかわいい。

思わず口笛でも吹きたくなるような、とびっきりの美少女だ。色

白の肌に、きらめく背中までの金髪。瞳は海みたいに透き通った碧。
なんとかショートパンツにボロシャツつー、男子みたいなあつ
さつしたカッコだけど、それがまた似合つてゐる。正直これほど「美
少女」って言葉がしつゝくるやつ、ここまで見たことがなかつた。

それでもひとつ。

色がなかつた。

俺から見ると入つてのは、それぞれ独特的の色を持つてゐる。ナビニ
の美少女は、そういう色を一切持つてなかつた。

ただビニールでも透明な、風に見える。

つて、なんか探してんのか？

少し困つた調子で手にしている紙切れを覗き込んでいふといふを見
ると、迷つたか、どこかへ行きたいか、なんだろう。

つい氣になつて、俺は立ち止まつたままその子を見てた。
この子がメモから顔を上げて辺りを見回すと、長い金髪が動きに
あわせてふわりと舞う。

そして少しのあいだ街並み眺めて、その子がまた下を向いた。
ダイレクトに伝わつてくる、感情。

泣いてる？

胸がしめつけられるようで、俺は思わずそのままのまゝ歩き出
た。

Episode : 02

The Girl

困っちゃったな。

家族みんなが手が放せなくて、あたしが預け物の引き取りに来たのだけど……店の場所が分からない。

近くまで来るのは間違いないけど、その先がさっぱり、だつた。この町は古くからあるせいとしても道が入り組んで、おかげで一本路地を間違えると、ぜんぜん違う方へ出でてしまう。時計を見ると、もうかれこれ三十分くらい迷つてた。
ぜつたい、母さんには言えない。こんなこと知られたら、それこそ何を言われるか……。

もつ一度メモで番地を確かめて、顔を上げる。田標物から見てもこの周辺、そう思いながらあたりを見まわした。
首都のアヴァンシティに似て、落ち着いた石造りの街並み。
立ち並ぶ建物はさほど高さはないけど、窓辺が色とりどりの花で彩られてとってもきれいだ。

「んな街で、すうしてみたいな。

なんとなくそう思つた。

あたしは今まで、ひとつの場合に落ち着いて住んだことがない。長くても半年、短いと一週間そこいら もつとひどいと、毎日移動しながらだ。

だからいつも、「んな普通の暮らしに憧れてた。

普通に毎日を過ごして、みんなでテーブルを囲んで……それが出

来たら、きっと楽しいだろう。

でもそれがムリなことも、十分わかつてた。

一瞬泣きたくなつて唇を噛む。

誰が悪いわけじゃない。だから諦めるしかない。けど、けど……。

その時あたしは視界の隅の、じつちへ来る男子に気がついた。
慌てて涙をぬぐう。

ダークティーブロンドの髪に、琥珀色の瞳。年はあたしと同じくらいか、もう少し年上だろう。ただあたしが普通より小柄なせいもあって、けつこう身長差がある。

まっすぐこっちを見るのが印象に残つた。
恐怖も何もない、ストレートなまなざし。

「んな風に、あたしを見る人がいたんだ。

対等に、あたしを見てくれる人が……。

その彼が目の前まで来て、あたしはまたうつむいた。
どうしていいかわからない。

けど、彼が先に声をかけてくれた。

「そんなに泣くほど　何困ってんだ？」

その声がなぜか信じられないほど胸に染みて、また涙がこぼれた。

Imad

「そんなに泣くほど 何困つてんだ?」

なるべくキツくならない調子で言ったのに、またこの子が泣き出しちゃった。

「あ、いやその、悪い。だから、なんか困つてるみたいだつたから……」「…」

俺が謝つたはずなこと、なんかこいつが謝つてまた泣いちゃまつ。ただ、俺以上にこの子のほうが戸惑つてるのが分かつた。ショウガねえから少し待つて、また声をかけてみる。

「じゃ行きたいんだ?」「

近づいてみるとこの子は俺より頭ひとつ高い、一八二三つ年下って感じだった。

「どうぞにじゅうや、妙にじゅうかりしてゐよな?

年齢が下になるほどはわちてくるものは漠然としていることが多い、この子の場合には年の割に、筋道だつた考え方をしてる。

まあこんなのがくまでも田安だから、アテにはできねえけど……。

「そのメモが行き先か?」

「え? あ、はい」

そう答えて、この子があつさつ俺にメモを差し出した。

しつかりしてると思つたのは、俺の思い違ひつてやつだつたらし
い。困つた顔で俺を上田遣にて見上げる様子ときたら、どう見たつ
て迷子になつたチビだ。

可愛いけど。

瞳の碧がすげーきれいだし。

「多分……」の近くだと、思つんですけど……

「えーと、ちょっと待てよ　って、何語だ、これ？」

俺、普通に使われてる言葉なら、ほとんど読めるんだけどな……？
けどここに書かれてる言葉ときたら、アヴァン語どこのかロデス
ティオ語でもねえし、ワサール語とも違ひ。

で、俺が悩んでたら、この子がまた泣きそつになりながら説明し
た。

「「」、「めんなさい！」

あの、ここに書いてある……バティエンの店つていう、改造屋さ
んなんです

「あ、なんだ。その店か」

相変わらず字は読めねえけど、その店なら知つてゐる。この町じや
腕がいいので有名な改造屋で、しかも店主は叔父さんの友達だから、
知らないわけがない。

もつともこの店、初めて行こうとした人間が必ず迷うのでも有名
だつた。

「あそこ、分かりづらいからな。

えーといこからだと、まづこの通りをこのまま向こうへ行つて…

…

「え？ それじゃここから……離れちゃうんじゃ……？」

「入り口がこの辺にないんだよ。んであそこの十字路を右へ曲がって三つ目の右手の路地を入って、今度は四つめで左、それから一つめを右へ行つてすぐもう一回右で……」

「え？ え？」

案の定、ここにも混乱した。

氣持ちはわかる。

俺だってこの街を知んなかったら、この説明じゃ絶対わからんねえだろう。ナビマジであやこ、これ以外に説明のしようがない。

Episode: 03 (後書き)

泣いてる美少女最強……

「えっと、十字路は右で、次も右で……」「三つ田？」

ついでに言つとあと、「地図を見て」つてのも役に立たない。なんか裏路地やら行き止まりやらで、地図と実際とがどうも合つてなかつたりする。

「「めんなさい、ちょっと何かに書かないと……」
「一緒に歩いてやるうか?」

初対面の相手に差し出がましい気はしたけど、一応訊いてみる。そしたら意外にも、この子がぱつと顔を上げた。

「あの、本当にいいんですか?」
「ああ、かまわねえよ」
どうせ時間、余りまくつてるし。

「 あらがとうござります」

しかも、エラく素直にお礼言つ。

普通これだけカワいいともう少しのお高くとまりそうなもんだけど、この子はそういうものの持ち合わせは、なかつた。

「いって。俺もじつは、時間あるからね」

並んで歩き出す。

それにしても近くで見ると、その美少女ぶりがさらに際立つ。

陽の光がきらめく、 黄金色の髪。

吸い込まれそうに澄んだ色合いの、 碧い瞳。

顔立ちの方も、 これをつかまえて美少女といわないほうがあかい。

これに加えてこの濁りのない色だ。

天は一物を『えず、 つ一つけじや。

あれせつたにウソで、 神様とやらねえこひしまくじだらう。

けど俺、 そのうちとんでもない」とこ氣づいた。

ちょっと見じゃ分かんねえけど、 ここつのベルトやブーツ、 いろんなモンが仕込んである。 しかも全部戦うための道具ときてる。 身のこなしも、 明らかに何かの格闘技を使うヤツの動きだつた。 見かけで判断して手なんか出した日には、 間違いなく返り討ちだらう。

でもどうみたってここいつ、 俺より年下かせいぜい同じくらいつまり十歳かそれ以下だ。 それなのにこんな技術を身に付けているなんざ、 マトモな話じやなかつた。

うちの生徒、 じゅねえよな？

俺と同じでM e Sの生徒つーのがいちばんありやうだね、 うちの学院にやこんな子いねえし。

だいいちこんだけの美少女が在学してりや、 絶対噂になつてゐる。

「あの……」「あの……

呼びかけられて、 はつと我に返つた。

「次はどうちへ行けば……？」

「あ、 悪つい。 ここは右だよ

そう言つて、先に立つて角を曲がる。彼女がすぐ後からついてきた。

だけじ足音がしない。当然気配もない。

どうなつてんだよ？

すゞしく氣になる。

けつときよく俺、ためらつたけど尋ねてみた。

「おまえさ……どうかM e Sの生徒？」

Episode: 04 (後書き)

「Jの年でこんな技術を身につけているなんて、やっぱそれ以外に考えつかない。

けどこいつ、不思議そうな顔をした。どうも俺の質問が意外だつたらしく。

「学院？ 違いますけど……でも、どうしてですか？」

「いや、あっさりうちに遭いもの仕込んでっからや……」

とたんに瞳が険しくなりやがった。
けつこう迫力がある。

「これが、分かるなんて」「

「そんな顔すんなよ」

なんか思わず慌てながら、ともかく俺は説明した。

「俺、シHラ学院の生徒だからさ。

んであの学校、そのくらい分かんなかつたら、やつてけないんだ

よ

「シHラ学院……いちばん古いM eH、私設の傭兵学校？」

彼女は学院のことは良く知らないらしかった。まるでパンフレットでも読み上げてるみたいな言い方だ。

けどそれで、一応は納得したっぽかった。

「じゃあ……わかっちゃいますね」

少しほほとしたような表情をみせる。

「でも、あの、Jのこと……誰にも言わないで、もうええますか？」

「言わない、約束する」

「こんな美少女に頼まれて、約束を破れる男いるのか？少なくとも俺にや、出来そうにない。」

「すみません、ありがとうございます」

俺の約束に、少女が笑顔になった。大輪の花が咲き誇る感じだ。そして、あ、と小さく声をあげる。

「あの店？」

『改造屋・バディーンの店』と書いてある小さな看板を、田代とく見つけたらしい。

たたたつと走って、扉に手をかける。

「あの子、やたら素早いぞ？」

俺も慌てて後を追っかけた。

「あの、すみません……」

「おっさん、お密だよ」

俺たち二人、店の奥に声をかける。出てきたおっさんは逞しい体つきで、改造屋つてより鍛冶屋つて風貌だ。

「なんだ、イマドか。お、今日はずいぶんかわいい連れがいるんだな？」

「おっさんがへんなどこに店構えてるから、わかんなくて捜してたんだよ。だから案内してきたんだ」

「おっさん、とにかく絡む。」

彼女の方は、俺らのやりとりを不思議そつに見てた。けど途中で「やつだ」って小さく囁いて、おっさんの方に向き直る。

「あの、兄がお願いしてたの……出来ますか？ 太刀、なんす
けど」

「ん？ ああ、出来るよ。えーと……」

おっさんが「じそ」、その辺を探す。

「ああ、これだろ？」

出てきたのは小太刀なんかじゃなくて、ホントにまともな太刀だ
つた。

それをこいつ、受け取ってすらりと鞘を外す。

刃の重さなんて感じさせない動作。

そして一瞬、彼女の顔に嬉しそうな、なのに淒みのある微笑みが
浮かんだ。

Episode : 06

The Girl

声をかけてくれたその人は、とても親切だった。
お店のことを知つてたし、この町にも詳しいみたいで、案内役まで買って出てくれたのだ。

途中で素性を見抜かれかけたのには、慌てたけど。

けど黙つてくれるつて言ひ、「世間」つていい人が多いんだ
と実感した。

ともかく彼の案内で、無事店までたどり着く。

「あの、すみません……」
「おっさん、お客だよ」

奥へ声をかけると、熊みたいな男の人が出てきた。普通改造屋つ
て言つと器用そうな人が多いから、これは珍しいかもしれない。

「なんだ、イマドか。お、今田はずいぶんかわいい連れがいるんだ
な?」

「おっさんがヘンなとこに店構えてるから、わかんなくて捜してた
んだよ。だから案内してきたんだ」

「どうやら」の彼、「」の店主と知り合つたらしく。どうりで
店の場所を知つてゐるわけだ。

けど「可愛い連れ」つて……?

別にあたしたち、イヌとか連れてないのに。
それに一人だけで、なにか話が弾んでる。

あ、そうだ。

その「ひやつ」とあたし、自分が何をしに来たのか思い出した。

「 兄がお願いしてたの、出来てますか？ 太刀なんんですけど」

「これを受け取らないことには、帰るに帰れない。」

「ん？ ああ、出来るよ。えーと、これだろ？」

一振りの太刀を出される。

受けとつて鞘を外すと、店内の明かりに照らされて刃が光った。腕がいいというウワサは本当だつたらしい。みごとな仕上がりだ。魔力もよく伝わって、刃との一体感がある。

でも「ひやつ」のはやっぱり、試してみないと、と思つた。服の試着と同じで、使って初めて分かることが多い。

「あの、試し切りしても……いいですか？」

「え？ お嬢ちゃんがかい？」

あたしがそんなこというなんて、思わなかつたんだろう。おじさんがとても驚いた顔をする。

でもおじさんに限らず、だいたいの大人の人は、そういう反応だ。

「まあ、裏のガラクタなら構わないが……」

「ありがとうございます」

了解を取つた上であたし、店の裏へと回つた。

Episode: 06 (後書き)

HP作成中・・・今日か明日辺り、出来たらいいな

I m a d

試し切りしてもいいですか、だつて？
太刀を抜く動作だけでも驚いてたのに、こいつとんでもないことを言い出しやがった。

まああの身のこなしじゃ無いとは言えねえけど、それにしたってこの太刀、ちょっとやそっとで使いこなせるわけじやない。

けど当人は「あたりまえ」って感じで、さっさと店の裏へ回っちゃう。しかも不安や迷いは、ぜんぜん伝わってこない。

なんとなく、俺とおっさんも後に続いた。

ワケわかんねえ妙なアイテムやら木切れやらが置いてある裏手で、こいつがぴたりと止まる。

つてちょっと待て、普通そんなもんに狙い定めるか？！

そうはいつも俺の思いなんて、他人に伝わるわけがない。

一方でこいつのほうは、何の躊躇いもなく太刀を正眼に構える。

外見からは想像できないような、すさまじい気迫。

こいつが太刀に流してくる魔力が、見る見るうちに高まってく。辺りの空気が張り詰める。

ややあつて、すうっとこいつが太刀を振りかぶった。

「破つ！」

裂帛の気合と共に刃を振り下ろす。

あれ？ なにも起こんねえ？

少なくともそん時、俺にはそつ見えた。けどここは満足げに微笑む。

そして云わつてくる、自信。

「ありがとうございます。いい仕上がりですね」

同時にこいつが狙い定めてた、腰掛け代わりの石が真っ二つに割れた。

「あわわ……！」

おっさんが腰をぬかす。

「マジかよ……」

俺も心底、度肝をぬかれた。

これでも俺、入学してからずっと、かのシコラ学院じゃ学年首席だ。だからまあ、手前ミソをさつぴいてもけつこひ出来る部類に入るはずだ。

だけどこいつ、そんなのとはケタが違う。

もつとも当人にとっちゃ、これは別段変わったことじやないらしかった。

「あの、これ、代金です。

それと……どこか珍しいアイテム置いてる店、ご存知……ありますか？」

何事もなかつたつて顔してる。

「え？　あ、ああ、アイテムね……？　ゲイルの店ならいいかもしれないが……」

おっさんがよつやく身を起こした。

「そのお店……どこですか？」

「やつだなあ、ひみつをせかしてことひるがきかう……お、やうだ。

「イマド、お前案内してこ

「ぐ、今なんて？」

もの思いにふけってたからおひさんの方、よく耳に入つてなかつた。

「なんだ、また聞いてなかつたのか」

あきれた調子で、おひさんが同じことを繰り返す。

「つてわけだから、お前が案内するんだ」

「分かつたよ。ええと……？」

名前を呼ぼうとして、まだ聞いていなかつたことに気づく。

「やつこえば、名前も書つてなかつたよな。俺、イマド=ザニース。
よひじへ

言こながら俺、右手を差し出した。でもこいつ、握らない。

「イマド？ 珍しこ名前……ですね。あたしはルーフィア=グレイスです。

それとすみません、あたし右手出す自信がなくて……

とんどもねえヤシ。

ただ言葉といつしょにすまなそつな感じが来てるから、根は悪い
ヤツじゃない。

「なんか、すいこんだな。まあこいや、行ひつけ

「はい」

俺らまた、並んで歩を出した。

アイテム屋の方はハズレだった。

ただ店のために言つとくと、別に品揃えが悪かったわけじゃない。ルーフェイアが欲しがるものが、レアすぎつてやつだ。

いきなり「精霊石が欲しい」とか言わされて、店のやつ田を白黒させてたし。

「欲しかったんだけど……」

「欲しいってなあ、んな物、あるわけないだろ」「

「そう……なんですか？」

けど、これからどうじよひ……」

お世辞にも明るいとは言えねえ店内から出できて、まぶしさついしながらルーフェイアが言ひへ。

「なんだ、予定ないのかよ?」

「列車の切符……夕方、なんです」

「じゃあ、どうかほか案内してやるうか?」

「ほんとに!」

なんかこいつ、やけに嬉しそうだ。

「あたし、こいつこいつ……あんまり、来なくて」

「はい?」

「いつたい、どーゆー生活してんだよ?」

けど貧乏でこれない、って感じじゃねえし……。

「ま、いいか。」

とりあえず、街の中心へ向かつて歩き出す。

「小っちゃえ町だし、たいしたもんないけどな」

「いいえ」

なんでも街中歩けるだけでいいらしい。

にしても変わってる、つうのかな？ わよつと普通じや信じらんない反応だ。

と、大きな本屋の前に立ちはだかった。

「あの、ここ…… 入つてもいいですか？」

「ああ」

別に入つたって、誰も困らない。

俺がうなずくと、ルーフェイアは喜んで店内へ駆け込んだ。しかしもすっげえ嬉しそうな感情、振りまいてくし。

それにしたって女子ってふつう、服とかなんか見て回ると思つてたけどな？

どうもこいつ、普通とは違うみたいだ。

ただ当人はいたく満足げで、かなり広い店内をざつと一回りしてゐる。それからきっと好きなんだろ？、歴史関係の棚の前で動かなくなつた。

「すうい。ここつていろいろある……あ、もつー。」

こいつ小柄だから、高い棚に手が届かないらしい。

「これが？」

代わりに取つてやる。

「すみません。あ、これ詳しい」

やつと見つけた、みたいな調子でぱらぱら本をめくるナビ、レジ

へ持つてく気配はなかつた。

「買わねえのか？」

「買いたいですけど……重くなつたやう。

でもあとで落ちついたら、買いに来ようかな？」

本の題名を覚えるようになぞりながら、妙なことを言いだす。
けじ落ちついたらつて……旅行つてワケじゃなさうだし、引つ
越してきた感じでもないし。
なんとも見当つかない。

「これと……あとこれと……」

「なにメモつてんだ？」

「ええ、いろいろ」

結局、ここつゝ一冊も買わずに出てきた。なんか題名と出版社、そ
れにちよこつと内容をメモつただけだ。
せつと店のやつ、ヤだつたろうな。
もつとも本人はソナシ、考えりやねえけど。

「ここの地方……けつこうひ、暑いんですね
「まあな」

真夏のここの辺は、けつこうひ日差しがキツい。しかもまだ曇下がりだからなおさらだ。
けどこいつ、それを気にする様子はなかつた。むしろあんまりにも白い肌に、見てるこっちが心配になる。

「どうか入るか？」

「大丈夫、です。

いいな。ここの街中」

つま先で石畳叩いて、こここここしてゐるし。

けど、ここのままぶらぶらしてゐただけつてのも、芸がないだらう。

「鐘楼、登つてみるか？」

とりあえず、そう持ちかけてみる。

「あの塔、登れるの！」

ぱつとここの顔が輝いた。

「んじゃ行つてみようぜ。こっちだ」

俺が走り出すと、こいつも遅れずについてくる。どういう育ち方をしてんのかはともかく、学院の生徒並みに鍛えこんでのは間違いなさそうだ。

五分ちょっと走つて、町の南にある塔の入り口へ着く。

「高い……」

「この子が真上を見上げながら感心した。

「いやおひ、この街の観光名所だからな」

もつとも建てられた由来は、そんな悠長な話じやない。なにせアヴァン帝国が衰退してからこの方、なにかにつけて戦火に巻き込まれてたこの街だ。だからこの鐘楼は普段は時間を知らせるけど……物見やぐらも兼ねてた。

イザとなつたらこの上に何人も上がりつて周りを見渡して、いち早くどつかの軍隊　自國の場合だつてある　を見つけようつてやつだ。

そしてヤバそなうならどつか安全な場所へ、女子供から避難させる体勢が、この街には出来上がつて受け継がれてる。

「じゃあ、今も……使つてるんですか？」

「いつもじやねえけど、今は使つてるっぽいな。

まあワサークがローテステイオに併合されてからひつち、どうもひの辺キナ臭いしな」

今じやどの教科書にも載つてる大戦はあつさり終わつたけど、そのざわくさにまぎれて力を伸ばしたローテステイオ国せいだ、どうも不穏な空氣は絶えない。

「ほひ、一番上にひらつと望遠鏡見えるだろ？　あれが四方についてて、この近所見張つてんだ。

昔は田がいいやつが、上がつてたらしきどな

「そひ、なんですか……」

説明を聞いたこいつの表情は、なんか意味深だった。妙に厳しい顔して、考え込んでやがる。

「どうかしたのか？」

「え、いえ、なんでも……。

上がれるんですよね？」

「ああ。ほら、来いよ」

鐘楼の入り口をくぐる。

「お、イマド、帰つてきたのか？」

「ええ、今日」

叔父さんの知り合いの人�が、入り口でいちおうチェックの役についてた。

「そつちは誰だ？　ずいぶん可愛い子じゃないか」
「えっと……友達ですけど、ダメですかね？」

適当に「まかす。

俺はもう顔バスだからいいけど、物見に使つてると部外者は入れてもらえないことがある。

「友達　学院の子か？　そんなら構わんさ。
お嬢ちゃん、こんな遠いところまでよく来たな。何にもないけど、
ゆつくりしてつてくれや」
「はい、ありがとうございます」

そのまま俺ら、螺旋の階段を上がった。

「けつじつ……新しい……？」
もうひとつ古くからある建物だと思つてたんだろう。ルーフェニアのヤツが不思議そうにつぶやく。

「何度も戦乱で壊れちや、建て直してつからな。
鐘楼自体はずつといつもあるけど、こいつは七年前に建てられた
やつだつてさ」
「七年前……あ」
数字を聞いて、こいつもすぐピンときたらしく。

ロテストイオが周りの国へ侵攻し始めたのは大戦が終結したすぐ後からだけど、このアヴァンは間にワサール国が挟まつてゐるせいで侵攻が遅れた。

でもそれもしばらぐの話で、地方へ逃れてたワサークのレジスタンスを一掃した後、このアヴァンへの侵攻が本格的になつて、国境近くにあるこの町も大規模な攻略の対象にされた。

「まあこの塔が爆破されちまつた以外は、案外被害少なかつたつていうけどな」

「そうなんですか？」

階段をまだ上りながら、ニヒツが聞き返す。

「俺もよくは知らねえけど。

ただ聞いた話じゃ、学院から例の傭兵隊が派遣されて、短時間でロデステイオ軍追い出したらしいぜ」

このおかげでアヴァンはどうにか占領を免れて、シエラ学院の傭兵隊はさらに有名になつた。

「シエラ学院の傭兵隊って、噂には聞いてましたけど……」

「ま、英才教育してる傭兵学校の、エリート連中だし」

それから俺、なんとなく訊いてみた。

「お前さ、そういう年、幾つなんだ？」

多分俺よりは年下だらうけど、聞いてない。

「えつと……十歳ですけど？」

「はい？」

思わず一瞬固まつた。

こんな華奢で、俺より頭一つちつちやいやつが、十歳？！

マジかよ。

「あの、どうか……？」

「同じ年だったとはな……」

「ええっ？！」

どりこりわけか、じこつまで田を山黒やせる。

「せつちけいや、じりしたんだよ？」

「んと、えつと……きつと、年上だつて……」

「なるほど」

確かにじりかやじこつを基準にしたり、俺は年上に見えねだらう。

「えつと、あの、『めんなれ』……」

「は？」

今度はじきなり謝られて、思いつきつ歎む。

「なに謝つてんだ？」

「だつて、あたし、年を間違えて……」

「ンなの謝なんくていいっての。気にすんなつて」
つて言つか、大柄なせいかだいたい俺は、年より上に見られる。

「ですけど……」「だから、いっての。

あ、そういう、いい加減その敬語もヤメな。タメ口でいいからもともと一寧なんだろうけど、どうも「そばゆくて俺は嫌いだ。

「あ、はい、わかりました……」「だから、それ」

「え、あ、『めんなさい』、わかった」

そういつの言ひてゐるうちに、階段が終わる。

鐘楼の上には交代で見張りしてゐるらしい青年団の人人が何人かと、防災担当のおっさんがいた。

「ども」

下から連絡が行つてたんだろう、俺らを見ても誰も驚かない。

「お、やつと上がってきたか。

にしても、お前がわざわざ上がりてくるなんて珍しいな。やっぱそのお嬢ちゃんの案内か?」

「そんなとこです」

叔父さんがこの町じゃ有名人なもんだから、たまに来るだけの俺まで、町のエライさんに顔知られまくつてる。

絶対に悪いことはできないってやつだ。

「ほらお嬢ちゃん、そんなとこ突つ立つてないで、じつち来て見て

『うん』

おっさん。

美少女ぶりに当たられたのか、猫なで声でルーフェイアの面倒み

てやがるし。

「あれ、ちょっと届かないか？」

そしたらほらこれで……よし、この上へ乗つて『J'irin』
拳句にその辺に置いてあつた木箱を動かして、踏み台にしてやつ
てるし。

「見えるかい？」

「はい、大丈夫です」

そうやってしばらく、町の外に広がる平原を眺めた後だつた。

「あ、煙……？」

「煙？」

妙な」とこいつが言い出す。

「どつかの改造屋の煙じゃねえのか？」

「んと、そうじやなくて、火事みたいな……」

「なにつ…」

緊張が走る。

「お嬢ちゃん、どこだつ！」

「いえ、あの、そこの町中……」

おっさんたちの剣幕に押されながらも、ルーフェイアが指差した。
慌てて見張りの一人が望遠鏡を向ける。

「分かるか?」

「はい、どうにか 南区の十番通りっぽいですね。キナ通りと交
差する辺りです」

「え?」

耳を疑う。

確か叔父さんとのこちばん上の姉貴とその娘のネミ、いま住んでるのそこり辺だ。春に来たとき家建て直すつてことで、仮住まいへの引越し手伝わされた。

「やべえ、俺ちと行つてきます。姉貴とか家が今そこんでー。」

「ホントか？ だが気をつけるんだぞ」

慌てて身を翻して階段を駆け下りつとした時。

ルーフェイアと目が合つた。

不安げでうるたえて……。

そうか。

こじでひといふのが嫌なんだろう。

「来るか？」

言つてやると、こじつがうなずいた。

「んじゃ行へやー！」

Episode・12

さつき上がりってきた階段を一人で駆け下りて、街中を駆け抜ける。にしても、華奢な見かけによらずルーフェイアはタフだ。俺だって学院で鍛えてるのに、ぜんぜん遅れないでついてくる。そのうち、前のほうに入だかりが見えてきた。

「て、マジかよっ！」

悪い予感つてのは当たるもんだ。姉貴たちのアパートメントつてもかなり豪勢 は火元じゃなかつたものの、もう隣の炎が移つてた。

「晴天続きだつたからな……」

誰かのつぶやきが聞こえる。

「すいません、通してもらえますか！」

どうにか人垣をかき分けて家の前まで行くと、その辺の男連中に姉貴が、取り押さえられてるのが目に入った。

「姉貴、だいじょぶか？」

「イマド！」

声に気がついてじっと振り向く。幸いぱっと見、ケガだのヤケだのはなさそうだ。

ただ、ほつとしたのも束の間だった。

「ネミがつ！ ネミが中につ！…」

「なんだつて！」

お土産でも買つてつて そいや忘れてた やりうつと思つてたあこつが、まだこの中に取り残されてるつて言へ。

けど思いのほか火の勢いは強くて、誰もが一の足踏んでる状態だ。
「消防はまだか！」とか、叫び声があがつてゐ。
と、気配もナシにルーフェイアが隣へ来た。

「中に……誰かいる……の？」

「それが、姉貴の子のネミツテチビが」

「わかった」

俺の言いかけた言葉が終わらないうちに、じにしがふわりと身を翻す。

「なつ、ちょ、待て！」

止める間があればいい、あつといつ間にその姿が、炎が縁取る建物へ消えた。

「ルーフェイアっ！」

とつさに、あとで、よくんないとしたと背筋が寒くなつた俺も後を追つ。

「バカヤロウ！ 死ぬぞ！！」

「イマドコロ、どうして？！ あたしはともかく……死んじゃうじやない！」

それは俺のセリフだら、と思つ。ゼンゼンやつたら、炎の中でこいつが平氣でいられるつてのか。

けど、言い切るだけあってちゃんと理由があつた。

「ちょっと待つて、いま精靈、移すから」

突然、奇妙な感覚が襲つ。

なんなんだよ、これ？

背筋が逆なでられるような、独特の感覚。

「『めんね、持つてた精靈……どうにか強制憑依、したんだけど

「あ、それでか」

シエラ学院の傭兵隊は、従属精霊を利用した強力な魔法で有名だ。だから俺もいちおつ、これについての知識はあった。

「精霊」って呼ばれる存在は、けっこありきたりだ。ちょっと曰く付きの山だの洞窟だの滝だの、そういうところへ行けばたいでいお目にかかる。早い話そういう「場」で出来上がった、この世界を作るエネルギーの塊だ。

しかも、それぞれに意思があつたりする。

なんでエネルギーの塊が出来たうえ意思まで持つのか、これはさすがに分かつてなかつた。神話の時代の超技術で作られたとか、死んだ人間の魂だとか、異世界から来るとか、いろんな説があるけど真相は藪の中だ。

ともかく精霊はそういうよく分かんねーモノで、でも捕まえて從えて上手に使うと、自分を強くしたりできる。

にしても。

精霊を使うとこうなるっては聞いていたけど、どうにもへんな感じだ。

ただ、焼けつくような熱さは消えてた。

「炎と煙、だいじょうぶにしてあるから。

いけない、早くしないと」

なんかいまいちピンとこないけど、炎も煙もいらぬつて
「とはないらしい。」

「えつと……一階？」

「いや、三階だ。姉貴んち、今そこだから」

「こいつと一人、炎が舐める階段を駆け上がる。幸い石造りの階段
は、まだしつかりしてた。

「ネミ、こるのかつ！」

「待つて、なにか……」

「どうもこいつ、耳も鋭いらしい。」

「辽の先……泣き声？」

廊下の向こうへ、固く閉ざされた扉を指差す。

「間違いない、姉貴たちの部屋だ。行くぞ！」

「ダメよつ、開けたら！」

バックドアでいつきに部屋が燃え上がつやけつ！

「じゃあどうするんだよー！」

答えはなかつた。代わりにルーフェイアのやつが、何か呪を唱え
だす。

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時と
なせ フロステイ・エンブランスつ！」

瞬間、冷氣系最上級呪文が炸裂した。

通ってきた後ろに氷の壁が出来たうえ、周りの炎も弱まって消え

る。

魔法つて、J-マー使い方もあるのか。

感心しながら、俺はドアのノブに手をかけた。Jマーももつ冴えてる。

それから慌てた。

「早くつー今なら開けられるー！」

「こいつが急かす。

けど。

「分かつてゐるけど、開かねえんだよー！」

炎にやられたのか、今まで凍りついたのか。ともかくドアはびくともしない。

「どいてー！」

じびれを切らしたルーフェイアが、俺を押しのけた。

「ネミちゃん、ドアから離れてーーー！」

一喝警戒してこいつ、田にも止まらない速さで蹴りを叩き込む。轟音とともに、一撃でドアが碎け飛んだ。

言ひじらふねえ。

どいをどうやつたら、あの細つこ脚でソな離れ業ができるんだか……。

「ネミちゃんごーーー！」

もつともこいつはこれは当たり前らしくて、そのまままつすべ部屋へ飛び込んでる。

「おねえちゃん、だれ…………？」

「え、えっと……その、助けに、来たんだけど…………」

そこで詰まるな。

あんだけ勢いよく魔法放つてドアを蹴り碎いたってのこ、ネミの質問にしどりもどりだ。

「ネミー、逃げつやー。」

「おにいちゃん?」

一瞬俺のことを忘れてたらギリシャ語の歌ひたけど、それはなかつたらしい。

「おにいちゃん、あつかつたよお……」

燃え始めたのと反対側の部屋にいたのがよかつたんだろう、ネミはケガした様子もなかつた。

「もひ、だいじょぶだ」

すがりついてきたチビを、とりあえず抱きしめる。
けどルーフェイアのまつは、感動の再会になんざかまつちやなかつた。

「早く、ここから出ないと。火が消えたわけじや、ないから」「そだな」

まあか通つてきたほつへ行くわけにもいかないから、手近な窓へ近寄る。幸いこっち側は、向こうほどには火は強くなかった。
でも窓を割つて炎が押し寄せるのせ、時間の問題だひつ。

「「」からロープでも使えば、どうにか……」「それじゃ、逃げ遅れちゃう。このままネリちゃん抱いて、飛び降りて」「む、ムチャ言つなつて!」

俺ひとりだつて三階なんてヤバいのに、抱いてたネリを落つことしたら笑い話じゃ済まない。

でもルーフェイアのやつは譲らなかつた。

「絶対、大丈夫だから。信じて」
言いながら「こいつ、水系の魔法で毛布を濡らして、ネリのやつを包む。

「冷たいけど、我慢してね。

ねえ、お願ひ

「わかつた」

「こいつのまつすぐな碧い瞳に、信じる気になれる。

それに炎の中から出るには、こいつせつたネリを抱いて飛び降りるのが、いちばん早くて確実だつた。

「クマさんもおー!」

さすが姉貴の娘。マイペース過ぎる。

「これか?」

さつきまで持つてたんだら、床に放り出されてたぬいぐるみを捨て持たせて、俺はネリを抱きなおした。

窓を開けた瞬間、熱風が吹き込む。

「頼むぜ…」

「うん」

ネミのやつを頭まで包んで、ギリギリ抱いて飛び降りる。
近づく地面。

「セレスティアル・レイメントツー…」

聞いたことのねえ呪文をルーフェイアが唱えて、落下が一瞬止まる。

それから「ぐく軽く、地面へ足が着いた。

次いで今度はルーフェイアが飛び降りてくる。

「大丈夫だつた？」

「ああ。

つと、このチビ、姉貴に返さねえと」とたんにこいつの顔が曇る。

「あたし……ちょっと違つとこ」、行つていい?」

「へ? なんでだ?」

「だつてその……田立ちすきちやつたから……」

そりやそりや。

ただでさえ人目引くヤツなのに、こんなことすりや田立つビーの話じゃない。

ともかくなんかこの辺ワケありらしくて、しかも路地の向こうから人の声が聞こえてきてるから、もう気もそぞろつて風だ。

「そしたらそだな、そこ左に曲がって真っ直ぐ行くと、ガッコの隣に公園あるんだ。

「やじだつたりぬとほづ冷めぬまでも、田立たなことゆひゆつ」

「ありがとう」

「言つてルーフュイアが駆け出して、立ち去る。」

「どうした?」

「うん、えつと……おでそりへ、来てもらつて……いこ?」

「へ?」

「きなつ何を誘つ、と思つたら壊つた。

「だつて、その、精靈……」

「なう、今取つてけよ」

「え、でも、強制でつけたの、元の……」

「ここにうつしてく。」

「分かつた。んじやこいつ返したりもと行くから、待つてうな?

「うん、あらがと」

今度このセルーフュイアの姿は、路地を曲がつて消えた。

「おねえちゃん、こいつちやつた?」

「ああ。」

「うんー。」「あー、ネル、ママ」といふべか?」

「どこまで状況がわかつてんのかわからねえこいつを抱いたまま、べぐべぐと遠回りで表通りへ戻る。」

「姉貴……」

「イマド、あなた無事で ネミツーー。」

後はもつ、言つひととナシの「」対面だ。

「ネミ、良かひた……。イマド、『』とにあつがとう

「いじけどさ、姉貴、今度つからネミひとつで置こてへなよ。」

「ええ、もう、絶対」

まあ、怖くて一度と出来ねえだらうけど。

それから姉貴が、思い出した顔になる。

「イマド、あの子は？ 無事なの？」

「あの子？」

「あ、あこつか」

きつちりルーフュイアのこと、覚えてたらしい。
かといつて、細かいこと訊かれぢや困るし……。

「無事だけど、なんか田立ちたくないって言つてた。
だから、こつそり逃げて隠れてる」

「あらまあ。困つたわ……」

お礼するつもりだつたんだらつ、姉貴が考え込んだ。

「どこへ行つたか、分かるの？」

「分かるけど、来ないとと思うぜ。その、キャライらしく」

「あひ……」

どうにか落ち着いてきたみたいで、姉貴お得意の妙なんのんびりペ

ースが復活のわざしだ。

「れ、苦手なんだよな。

」の姉貴のスロー・ペースに巻き込まれると、なんか抜けらんなくなる。ついでに言つと叔父さんちの姉貴三人は妙に個性的で、いつも振り回されるのがオチだつた。

つか姉貴、マイペースはいいけど、家が焼けてるの忘れてねえか……？

「そ、それより姉貴、ネミ病院連れてけよ。見た目だいじょぶ。そうだけど、ほり、一応さ。

それに出てくつとき、」いつ濡らした毛布で包んじまつたから、このままだと風邪ひくかもしんねえだろ？」

なんとか別の方向へ話題を持つてく。

状況が状況だから、姉貴もすぐ乗った。

「そうね、そうよね、そうするわ

「それがいいって。

ほら、ちょうど救急車来てるし」

姉貴とネミをそっちへ押しゃつて、救急隊にワケを話す。もちろん即刻乗せてくれて、まっすぐ病院行きだ。

「イマド、あの子によろしくね？」

「はいはー」

「ネミが元気だから、姉貴も救急隊もなんかのんびりだ。

「きゅうきゅうしゃー」

当人、すげーはしゃいでるし。

消防も到着して、その辺りが池になりそうな勢いで放水してるから、もうだいじょぶだろつ。

ともかく一人を見送つて、やつと俺の身体が空いた。

早くしねえと。

途中で迷子になってしまったねえだらうけど、ルーフュニアのやつをひると
りで待たせとくのは、なんか怖い気がする。
で、そっけへ駆け出そうとしたとき。

「イマドー！」

呼ばれて振り向くと、今度は叔父さんと姉貴のダンナだった。

「アーネストとネミはどうしたつ？！」

仮住まいとはいえ家焼けてるうえに、姉貴とチビの姿が見えない
もんだから、半分パニクってる。

「無事だよ

「どこにいるつー」

「どつかの病院

「どつかって、どこだつー！」

「いや、俺もそれは……」

ンなの、救急隊しか知らねえだらうじ。

「すぐ探しに行くぞ！ ほら、来い！」

「ちよ、ちよいタンマタンマ

強引に腕掴まれかけて、慌てて逃げる。

「じりつ、どこへ行く！」

「用事あるんだって！ ああもつ、細かいことは姉貴に訊いてくれ
よな！」

これ以上といつ捕まらないこいつのこと、俺は慌てて駆け出した。

Episode: 15 (後書き)

お姉ちゃん、マイペースすぎ。

Episode : 16 約束

Ruffer

炎の中からどうにか女の子を助け出した後、あたしは教えてもらつた公園へ向かつた。

確かに、左へ曲がつて真つ直ぐつて。
思い出しながら、道路を歩いていく。

遠い空。

優しい風。

強い日差しも夏を思わせて、すてきだ。

道を行き交う人たちもなんだか、みんな楽しそうだつた。

いいな、こういつの……。

公園までは、意外なくらいすぐだつた。改造屋さんを探してあれだけ迷つたことを思うと、なんだか信じられない。

中へ入つてみると、まぶしいくらいの縁が生い茂つていた。それ

にとつても静かで、大通りの賑やかさが嘘みたいだ。

木々の間からの木漏れ日。
さらさらと流れぬける風。

石を並べて作られた、小さな水路のせせらぎ……。
覗きこんでみると、ちゃんとお魚まで泳いでいた。

誘われるようにしてブーツを脱いで、足を入れてみる。

気持ちいいな。

熱くなつていた足が、冷やされていった。

まだちょっと暑いせいか、公園内はそれほど人はいない。きっともう少し遅くなつてから、みんな夕涼みにでも来るんだろう。

隣には聞いた通り、学校があつた。石造りの立派な建物で、威風堂々、という感じだ。

けど、人の気配はなかつた。校庭も校舎も静まり返つてゐる。ちょっと寂しかつた。

学校がどんなところのか、あたしは知らない。もちろん何度か目にしたことはあるけど、入つたことは一度もなかつた。

当然だけど、中で何をするのかはもつと分からぬ。

勉強だつて、いうけど。

ただそれを、たくさんの人と一緒にやるんだつて言つ。うまく想像できないけど、楽しそうだと思った。
きっと、分からなかつたりしたら、みんなに訊いて……。

つい泣いてしまいそうになつて、あたしは慌てて唇を噛んだ。こんなところで泣いていたら、周りの人だつて呆れるだらう。なによりあたしには……関係ない話だ。

考えを無理矢理、明日からのことにもつていく。地形、スケジュール、必要な装備、それから連絡手段。

かなうわけのない夢よりずっと、そのほうが大事だから……。

I m a d

叔父さんと姉貴のダンナを振り切つて、俺はビデオにか約束の公園まで來た。

まさか、着いてるよな？

まああいつ方向音痴じやなさそつだし、さつきの場所とちがつて

今度は簡単だから、ちゃんと行き着いてるだろ？。

つて、あれ？

広い公園の中をざっと見回しても、ベンチにあいつの姿はなかつた。

「自分で返せって言つたくせに、どこ行きやがったんだか」

独り言いいながら、その辺をふらふら探す。

もつともどつかの自然公園つてワケじゅねえから、あいつの姿は割とすぐ見つかった。人工のせせらぎの、水源？に近い奥のほうだ。暑かつたのか、ブーツ脱いで水に足突っ込んでる。

「悪い、ちよい時間食つちまつてさ」

「あ、イマド……？」

金髪が振り向く。

なんか、ひどく寂しげな表情だった。

Ruf ei'rの部分が短すぎるので、ちょっと足してみました

「どうした？」

「あ、うひさ、なんでもない……」

口じゅしゃべり声で泣いてるナビ、泣かれてぐるのは涙だ。

それも、うひまだ悲しくなつちまつがつくな。

そのまま俺らは沈黙した。

木の葉がざわめく音と、水の流れる音とが吹きぬける。
そのうち震えきんなくなつたんだから、こいつが取つてつけたふ
りこりふやこた。

「精霊、回収しなくちゃ……」

「やこや、そだつけな」

話に乗つてやる。

「えーと、どうすりゃいい？」

「えつと……そのまま動かないで、くれる……？」

言いながらこいつが水から上がつた。
んでそれから、ひとつからかタオル出して足拭いて、靴下とブーツ
履いて……。

「おーい、早くしてくれって」

「う、ごめん……」

慌てたら今度は、足もつれてやがるし。

「落ち着けって」

「う、うん」

結局、仕切り直してもつかいになつた。

「『めんね、ほんとに今度は……動かないでね
「分かつてるつて」

なんでも強制憑依ってのは、合わねえ形のとこに無理矢理押し込むようなもんらしい。だから外す時は、引っ張り出す（？）のが大変だつて話だつた。
こいつがなんかしてるんだろつ。ずーっとしてた違和感が強くなれる。

マジで氣持ち悪いいぢ?

しかもルーフュニアのやつもなんだか、苦労してゐみてえだつた。

「おい、だいじょぶなのか？」

「たぶん……」

口っここと言ひつい。

「もうちよつと……待つて。なんだかしつかり、くつこちゅうつてて……」

「そゆもんなのか？」

岩場に貼つついてる貝みてえな言い方だ。

「あたしもこんなの、初めて……あ、戻つてきそう」

それからまた少し騒いで、よつやく精靈が取れた。妙な感じも同時に収まる。

「ごめんね、その……大丈夫？」

「ぜんぜんなんでもねえぞ？」
答えて、こいつがほつとした表情になつた。

「んでよ、それ、精靈か？」

「うん」

ルーフュニアの手の上に一つ、水晶の塊みたいのがある。ひと

つは黒っぽい色で、もうひとつは妙にやわらかかった感じだ。

「なんか、いつぱい持つてんだな」

「母さんの……借りたの」

「ンな簡単に、貸せるもんなのか?」

学院の先輩たちなど、ほとんど見せてもくれねえのに。

ルーフュニアのほうは、俺のつぶやきは聞いてなかつたらしかつた。公園の中をひととおり、眺め渡してゐる。

そして、言った。

「いいよね。じつじつ……平和なの」

「あ、ああ……?」

なんか不思議な言葉だった。

誰でもいい。IJの言葉は。それに実際にIJは、じつ見たつて平和だ。

けどIJが言つと、IJの言葉はなぜか重かつた。

そしてまた、沈黙。

と、流れる風に押されたみたいに、ふわりといつが顔を巡らした。

「学校、誰も……いないね
「夏休みだからな」

俺が暮らしてる学院はその成り立ちの関係から、孤兎を優先的に受け入れてる。だから帰る場所がないやつがかなりの数で、夏休みでもけつこうがやがやしてた。

だけど普通の学校つてやつはこの時期は完全に休みだから、人がいるほうが珍しいだろ？

「何、するのかな……？」

分かりきったことを、どうこうわけかこいつが訊いた。

「勉強だろ？」

「そつか。

みんなで……するのかな？」

ルーフェイアの言つことは、どう考えてもへンだった。俺だって学院生だから普通といろいろ違つたりつてのはあるけど、もうそゆレベルじゃない。

信じられねえ思いで、訊く。

「お前さ、もしかして学校、行ったことねえのか？」

「うん」

予想通りの、いちばんヤな答えだった。

俺は経緯がちょい変わつてつから、そゆことはない。けど学院にいるおんなじ孤兎連中には、前はガツコも行かずに働いてたり悪さしてたりつてヤツが多かった。

「そしたら、俺と一緒に学院来るか？」

「え？」

意味が飲み込めなかつたらしくて、ルーフェイアのやつがきょとんとした顔になる。

「いや、だからで、お前親とかいねえんだろ？」

「ううん、いるナビ？」

「は？」

「」の答えは予想外だった。

「ちよい待てよ。親がいるのにガツコもいかねえで、何してんだ？」

「戦争」

「な……」

文字通り絶句する。

確かにこれなら、「」がめちゃくちゃ強そうだったりいろんなアイテム持つてたりつてのは、説明つくだろ？

けど、ンな話があつていいワケない。傭兵学校に住んでる俺だって、実戦なんざ未経験だ。

そんな俺ヘルーフェイアのやつは、別段珍しくもねえこと言つてみみたいな調子で説明する。

「あたしの「」……父さんも母さんも、傭兵で……だからあたしも、ずっと一緒に……」

「なんなんだよ、それ！」

聞いた瞬間、俺は大声出してた。

親と一緒に分かる。けどだからって、「」まで巻き添え食つていわれはない。

「でも、しょうがないから……」

諦めきつたみたいなこいつの表情が、よけいカンに触った。

「だからって普通、ンなとこガキ連れてくかよ！」

「そうかも、しれないけど……でも、しょうがないの。

それに父さんも母さんも、あたしと一緒に、いたいみたいだし……

「あ……」

それ以上言えなくなる。

俺はルーフェイアとは、反対だった。おふくろは三歳で死んじまつてるし、五歳になると同時に学院に押し込まれて、親父と過ごした記憶もほとんどない。

そしてある日親父が『亡くなつた』って連絡が来て、それで全部終わつた。

どっちが、幸せなんだろうな？

やむを得ない理由があつたとはいえ親父から放り出されちまつた俺よりは、ルーフェイアのほうが可愛がられてるだろひ。

でもその代償は、「戦場」。これ以上とんでもねえ話は、たぶん世の中ないはずだ。

「どうにか、なんねえのかよ？」

俺の問いに、こいつは静かに首を振る。

そして微笑んだ。

「大丈夫、あたし慣れてるし……勉強もちゃんと、しているし……」
「ま、マジメ、なんだな」

俺なんざ勉強は、逃げられるだけ逃げてるってぇのに。
ルーフェイアのほうは俺の答えに不思議そうな顔になつて、「勉
強がいちばん楽しい」つづけ、とんでもないことを言つてる。

「お前が、少しダチと遊ぶとかなんとか、したほうがいいぞ?」

「ダチ……?」

なんか言葉、通じてねえし。

「んと、友達。いるだろ?」

「つづん……。

あ、でも、兄さんとか隊員の人とか……ヒマなら相手、してくれ
るの」

「なんだよそれ

もう、ガツ「ど」の話じゃない。

要するにこいつはどつかの軍の中みたいなどいで、ダチもなしに
ただ戦つて……。

なんか腹が立つた。

こいつから伝わってくるのは、悲しそばつかだ。なのに口と表情
じゃ、平氣な顔してる。

だから今日は、腹が立つた。

「やめられよ」

「え？」

「そんな生活、やめちまえよー。」

自分でも、何で腹が立つかはわからない。けビビリにも許せなかつた。

そんな俺を呆然と見るルーフェイアの瞳に、急に涙があふれる。

「「」めん……」

「え？　あ、いや、泣くなよ。やのせ、お前に怒つたわけじゃ、ねえから」

女子に泣かれたことなんかねえから、めちゃくちゃ対処に困る。
けどよっぽどこたえちまつたのか、どんなに慰めてもこいつは泣きやまなかつた。

「な、頼む、もう泣くなつて」

「「」めんなさい！」

ずーっとこれの繰り返しだ。

結局俺は、泣きやむのを待つしかなかつた。

ルーフェイアのやつを見ながら思つ。

たぶんこいつは……今の生活が、気にいってるわけじゃないんだ
うつ。でもなんでだか、それをやめよといひつけつてない。

不思議だつた。

それとも、なんか弱みみてえのがあつて、匕つもならないの
か。

「……だこじょぶか？」

少し収まってきたのを見て、訊いてみた。

さつきとちよこつとだけ、違う答えが返つてくれる。

「「」「」めんなさ」……つん、だいじょうぶ……」

言いながらルーフェイアのやつが、涙をぬぐいながら顔を上げた。あんだけ泣いてさすがにばつが悪いのか、俺のほうは見ないで時計に目をやる。

「あ、いけない……」

もつかい涙をぬぐつて、ここつが立ち上がった。

「どうした?」

「時間が……」

「へ?」

間抜けすぎる返事をしちまつてから、思い出す。

「そいや、列車がどうとか言つてたつけな

「うん」

ルーフェイアのやつがうなずいた。

「急がないこと。

えつと、駅、どう……?」

俺が街中引きずり回しちまったから、現在位置がわからなくなつたらしい。

「「」「」ちだ」

この町だったら俺のほうが断然土地カンがあるから、言葉と一緒に走り出した。

ルーフェイアも走り出す。

「どのがりー、かかるの?」「走つて十分ちょいとこだな」「よかつた、近いんだ」「この答えに内心悩む。

近くはねえと思うぞ?

まあ日常的に戦争してちや、近い部類に入つたりまつのかもしけねえけど……。

なんか複雑な気分になりながら、それでも俺は走った。駅が見えてくる。列車も停まつてて、どいつやら間に合つたらしかつた。

「よかつた……」

「乗るまで氣い抜くなつて」

目の前で行かれた口にや、シャレにもなんねえだろうじ。

ルーフェイアのやつがポーチから、長距離線専用の、記録石がはまつたカードを出す。最近駅で切符代わりに売るようになつたやつで、これがないと乗つても客室へは入れねえから、デッキであつさり車掌に掴まるつて寸法だ。

「どこまで行くんだ?」

「国境超えたところで降りて、あとは車……かな?」「けつこう遠い。

「ンなとこから、日帰りで来たのか?」

「だつて、太刀をちゃんと研げる人つて、少ないから……」
「そういや『イツ、元々は太刀を受け取りに来たんだつた。けどあの改造屋のオヤジがそんなの出来るなんて、俺は初耳だ。

「あのオヤジ、ンな隠しあつたのか」

「え？」

確かに研ぎ師だけじゃ食べてけなくて……改造屋も始めたつて、聞いたけど……？」

「へえ」

改造屋のほつもあんだけ腕がいいのに、それが副業だつてんなら、そつとうのもんだ。

そのとき、アナウンスが流れた。もうすぐ発車らしい。

「行かなきや。

ありがと。すく、楽しかった」

言つてこいつが列車の「チッキヘ上がりかけて 振り向いた。

「あのね、えつと……」

「どした？」

歯切れ悪くためらつてから、こいつが口を開く。

「この町から 逃げて」

「は？」

思いつきり意味が飲み込めなくて、悩んだ。だいいち俺、逃げなきゃヤバくなるような話にや、首突っ込んだことない。けどこいつは、けつこの真剣だつた。

「理由が言えないけど……お願い、ここから早く、離れて」

「あ、ああ……」

ともかくうなずく。

もつともルーフニアのまつも、それ以上は期待しなかつたらし
い。

「「めん、へンなこと……言つて。

せよなら」

背を向けた「」この金髪が、落ちてきた陽を受けて見事なくらいに輝いた。

「あ、あのな」

呼び止める。

「え？」

ルーフニアのやつがもつかい振り向いて、ふわりと髪が踊った。
なんか、どきつとする。

「そ、その、俺さ、シララ学院の寮にいるんだ。だから気が向いたら……遊びに来いよ」

「ほんとに？」

陽の光以上に、「」この表情が輝いた。

同時に海の碧の瞳から、また涙がこぼれる。

「そんなふうに言われたの……初めて……」
「当然なんざ、ホントはどこにもねえ約束。
けどそれでも、友達つてのを知らないこいつには、嬉しいらしかった。

「ありがと。さつと、さつと行くから……」

「ああ、待つてる」

発車を知らせる汽笛が鳴った。

Ruffer

国境を超えてすぐ、予定の駅であたしは降りた。
改札口を抜けて、あたりを見回す。
そして、見つけた。

「 兄さん！」

急いで走り寄る。

「お帰り、ルーフェイア」

兄さんはあたしと同じ髪で、瞳だけがちょっと薄い。それと、本当は従兄だ。

でも、そんなことは関係なしに大好きだった。何でも知つてて、ずくづく頼りになつて……。

「太刀はどうだつた？」

「えつと、これ……」

急いで差し出す。

「ずくよく……出来てるの……」

「さて、本当かな」

「え……」

信じてもらえない。

「でも、試しきつさせてもらつて……ちやんと石、切れたかい……」

「刃こぼれするぞ?」

「い、ごめんなさい!」

言われてみれば、あたりまえだ。せっかく研ぎ出したのに……。

「「めんなさい、」めんなさい…！」

謝つても済まないけど、でもそれしか出来なくて、何度も謝る。
そんなあたしの頭を、不意に兄さんが撫でた。

「分かってるよ。お前の腕は、一流だからな」

「……」

褒めてもらひた。

「や、行くぞ」

「うそ」

歩き出した兄さんの後ろを、ついていく。

あたしの面倒を見てくれるのは、いつも兄さんだった。父さんと母さんも一緒に住むけど、任務に出でたりどつかへ行ってしまつたりで、顔を合わせることがちょっと少ない。
なにより、変わつてゐし。

娘のあたしからみても、両親特に母さんは常識外れだつた。適当な言葉が見つからないけど、あれは絶対に「普通」っては言わないだらう。

兄さんが車を置いた場所は、少し距離があるみたいだった。駅前の広場を過ぎても、まだ着く気配がない。

「どこのまで……行くの？」

「どりだらうな」

不安になるようなことを言われる。

「車、だよね……？」

「そんなこと言つてないぞ」

「え……

まさかキャンプまで歩くこと、ないはずだけど……。
けど兄さんはそれ以上何にも言ってくれなくて、あたしは困惑して
たまま、あとをついて行くだけだった。

「ねえ、兄さん、ほんとこどりまで……」

「日程が決まつたで
はつとする。

「いつ、なの？」

「五日後だ」

それで十分だった。

これでもつ 游びの時間は终わりだ。

「戻つたら、もう少し細かいことを詰めるからな」

「うん」

日暮れて闇に包まれ始めてるあたりが、また暗くなつた気がした。

Episode : 22 再会

I m a d

俺は、暗くなつて静まり返つたあの公園に居た。
あれから五日過ぎてる。

ムダに、しちまつたな。

あいつが最後に言つたことの意味はずつとわからんねえで、結局俺
はこの町に居つぱなしだった。

ようやく理由がわかつたのは、昨日。それもニュースになつたか
らだ。

誰も知りやしなかつたけど、実はロデスティオ軍、国境のすぐ向
こみに展開して奇襲するつもりだつたらしい。それを軍に関係ある
あいつは知つてて、俺に「逃げろ」つて勧めたんだろう。

ただ、結果的にはなんにもなかつた。奇襲が失敗に終わつたから
だ。

報道でしか聞いてねえから細かいことはわからんねえけど、どうも
徴兵されてた元ワサーール人の兵士が裏切つて、アヴァン側に密告し
てくれたらしい。

その話が元になつて、このアヴァン公国はすぐシエラ学院に傭兵
隊の派遣を依頼、合わせて自前の陸軍（そんないたいした部隊じゃな
い）も動かして、上手いこと奇襲部隊を奇襲したつてコトだつた。

今はロデスティオ軍の一部の部隊が壊滅、残りはもぢょと奥地
の基地を目指して敗走してる。

でもそんなことより、俺には気になることがあつた。
こないだ会つたあいつは、今どこでどうしてんのか……。

ローテステイオ軍の奇襲の話を知つて、俺に忠告してくれたくら
いだ。たぶん向こうの軍に属してゐるつてやつだな。

だけじ向こうの軍は、敗走してゐる。壊滅した部隊もある。

「……ルーフェイア、お前バカかよ」

俺に忠告しきながら、自分はその真つただ中だと、どう考え
たつてバカの極みだ。

耳を澄ますと静まり返つた闇の向こうから、「ぐく稀に「音」が聞
けた。だからたぶん、まだ戦闘は終了してない。

その中で、あの俺よりちちゅうちゅういあいつは、戦つてゐる。
それとも、もつ……。

「ンなわけ、あるかよ」
思わずさつ、口に出した。

なにせあいつはあの強さだ。かすり傷だつて、そう簡単には負い
やしねえだらう。

けど、自分で確かめたわけじゃない。

だから俺に後できるのは、あいつに何もなこうちに戦闘が終わ
ることを、祈るへりじいだった。

「イマジ、じこに理だのか

あんまりいつまでも帰らねえから心配したんだな。叔父さんが
探しに來た。

「いい知らせだぞ」

「知らせ?」

たぶんこの戦闘関係だな。ただそれがホントにいか悪いかは、

わかんねえけど。

叔父さんのせつめ俺の口調こな気がつかなかったらしくて、そのまま話し始めた。

「ローテステイオとの間で、停戦協定が結ばれるらしい。お前の先輩たちのおかげだな」

「……」

答えるらんなかつた。

俺らの先輩が活躍したのは、はつきりこねばまあ嬉しい。

けど、あいつは？

でも停戦すれば、ここまで無事ならあとほどひこかなるだひつ。
その時。

(イマドキ)

声が　声じやねえかもしんねえけど　確かに、聞こえた。

「ルーフュニア？　どこだ？」

「ここ……」

声を頼りに、公園の奥へ走る。

暗がりから、あの金髪が現われた。なんかふらつこてる感じで、慌てて支えてやる。

つて、ちょっと待て！

服をべつたり染めてるのは、血だ。

「お前、ケガしてんのか？」

「うん……ぜんぶ、返り血……ふふ、やられた……」

「いつが低く嘲う。

たぶん自軍のやつが裏切ったことを、言つてるんだな！」

「なんか、元ワサークル人のやつが、密告したんだってな」

「それも……あるんだけど」

また低く、いつが嘲つた。

「他になんか、あるのか？」

「ロテスティオの正規軍、あたしたち傭兵隊を見捨てて盾にして……

部隊、壊滅したの」

「じゃあ、あの壊滅ってのは、まさか……」

「うん。そういう……こと」

俺は、うちの先輩たちがやつたことだと想つてた。
けど違う。あれは味方に、見殺しこそされたつてワケだ。

「考えとくんだった……読みが、甘かった……」

「こんなちっちゃいやつが言うとは、思えねえセリフ。

なんか一瞬背筋に冷たいものを感じて、俺は慌てて話題を変えた。

「でもよ、なんでお前、こんなところいるんだ？」

「から国境はたいして距離はねえけど、戦闘やってた場所はそのまま向こうの、けつこう離れたトコだ。
まして敗走してんなら、いつか来るワケがない。

「たまたまあたし、最前線について……前線が、後退してたから……疲れてんのか、そこでこいつはいつかい言葉を切った。

「ともかく、下手に撤退するよつ……」いつしか来た方が、助かると思つて。

それにあたし……小さいから大人みたいに、言われないし……」

よくわかんねえけど、要するに自分がガキなのを逆手に取つて、うまく大人の兵士の目を躊躇しちまつたらしい。で、あとはどさくさ紛れに国境超えて、町へ入つちまつたんだろう。

けど確かにこいつが公園あたりで血だらけで倒れてても、敵だなんて誰も思わねえはずだ。あとは当人がそゆことかえ言わなきや、それで終わる。

すげえヤツ。

内心舌を巻きながら、俺は違つことを言つた。

「ともかく叔父さんち行こいつせー、医者だから、診てもうひる」「うん、ありがと……」
まともに歩けそうもねえこいつに、手を貸す。
「だいじょぶか?」
「だい……じょうぶ……」

言つてゐるうちに、こいつの身体から力が抜けた。

「お、おい、しっかりしろよー。」

叔父さん、こっち来ててくれ!」

叔父さんは医者だから、こゆ時は頼りになる。

「どうした? お、こりゃ大変だ」

わけもわかつちゃねえまま、でもばっちら、叔父さんがこいつを抱え上げた。

「すぐ、うちへ運ぶぞ。

イマド、その懐中電灯で足元照らしてくれ」

「わかった

叔父さんと二人、いつもの道を戻る。

「うん、呼吸はしっかりしてるな。ひどい出血もなさそうだし、顔色もそれほど悪くはないし……。

しかし驚いたな、これは全部他人の血か？」

ルーフェイアのやつ運びながら、しっかり容体チェックしてるし。

「叔父さん、こいつだいじよぶなのか？」

「外傷も見当たらぬし、顔色から見て内臓の損傷もなさそうだから、たぶん大丈夫だね」

「そつか……」

とりあえず、ホツとする。これならたぶんよっぽどじやなきや、ヤバいことにはならねえだね。それに叔父さんの家はたいして遠くねえから、すぐ手当でもできる。

町ん中は、通りも含めてほとんど人影はなかつた。外出禁止令なんかは出てねえけど、やっぱ状況が状況だから、みんな家にこもつてゐる。

けどこれも、明日辺りには解消だろう。

一階が診療所を兼ねてる家まで戻つて、俺は呼び鈴を押した。

「はいはい、今開け　あらう」

叔母さんがドアを開けかけて、あんまり驚いてなさそな顔でびっくりする。このへん、いちばん上の姉貴とそっくりだ。

「可愛いわねえ。

「どこで拾つたの？　あたしこんな子、欲しかつたのよねえ」

「叔母さん……」

「あら、違つた？」

「ひとつ疲れる。

つてか看護士なんだから、見りや状況分かるだろに。

ただこの人の場合、ほとんどが本氣だからかなり怖かつたりする。叔父さんは慣れっこだから、まるつきり氣にもしねえで、奥の診療室ヘルーフュイアのやつを寝かせた。

「ふむ。やつぱり眠つてるだけみたいだな。

といひでイマド、この子があの、ルーフュイアって娘なのか？

「そだよ」

ずいぶん迷いはしたけど、結局俺はあの日火事場であつたことを、

叔父さんたちにはぜんぶ話した。だからネリを助けたのがここにつだつてのは、知つてゐる。

ただ直接見たわけじゃねえから、叔父さんはイマイチ信じられないみたいだった。

「どうか、こんな子がなあ……」

「すっげえ強かつたけどな」

あいつにして見りや炎の中も、そのへんの通りと大差ない気がするし。

「まあいい、ともかく今は諦るのが先だな。お礼ならあとから、ゆっくりできるだろう」

叔父さんがその辺から、いろいろ要りそうなモンを出す。

「ほらほら、あなたこいつまで面るの？」

「え？」

ぱーっと眺めてつと、叔母さんが妙なことを言つ出した。

「だつてこいつ、ホントに……」

当人がケガないつて言つてたから、たぶん平氣だらうけど、やっぱ心配だ。

でも叔母さん、ぜんぜん違う理由だった。

「女の子に興味があるのは分かるけど、やつぱりダメよ？」

「ちつ、ちがつ！」

「はいはい大丈夫、分かってるわよ」

結局誤解されまくつたまま、俺の部屋じやなくて待合室（なんでだ？）へ追い出される。

「ちょっと待つててね、すぐ終わるから」

「…………」

なんか言つ氣力も失せて、俺はその辺のソファに座り込んだ。備え付けの通話口が着信の合図を出したけど、無視する。だいいち遊びに来てるだけの俺が出たつて、話がこんがらかるだけだ。

あいつ、何してたんだろう。

戦つてたつてのは、だいたい分かる。けどその中で、あいつは何を見てきたのか。

あの時、泣き出しちまつたルーフェイア。

ガッコで何するのかも、友達がどんなものかも知らずに、ただ戦う毎日。

けどそれが、あいつことひでの日常で……。

ンなことをほんやりいろいろ考えてたり、奥から叔父さんが顔を出した。後ろになんか叔母さんも一緒に、診療材料一式抱えてる。

「イマド、すまん、留守番してくれるか?」
「いいけど叔父さん、こんな時間にどこに行くんだよ?」

「」の暗いのにと思つて訊くと、けつこーシビアな答えが返ってきた。

「町の病院へ昨日から負傷兵が運ばれてるんだが、予想より多かつたらしくてな。手が足りないから来てくれと、せつき連絡があつたんだ」

「あ、あれか。

俺が無視したのが、そつだつたらしい。

「悪いが、頼むな」「ん、わかった」

まあ街中は外出禁止令同然の状態だし、こゆ理由なら誰か来ても、すんなり帰つてもうらえるだろ？。

「あの子は、できるだけ寝かせておくんだ。
それから私たちは裏手の学校にいるから、何かあつたらすぐ連絡
しなさい」

「了解」

近いってのも、なによりだつた。あの公園の隣のガツコなら、走
つてきやすぐの距離だ。

「じゃあ、頼んだわねー」

妙につきしきしたふうな叔母さんの声を残して、一人が出てつた。
今まで以上に、家の中が静まり返る。

「にしても、もうこいみな？」

そのまま待合室にこもるつてのも續に障るから、俺は奥の診療室の

ドアを開けた。

ベッドの上に、眠つてゐるルーフェイアの姿がある。

辛そうだった。

辛そつてゐるはずなのに、それでもまだ心が痛そうだ。

「……バカやろ」

小さくつぶやく。

んなに辛いのに、なんでやめねえんだか……。

と、不意にルーフェイアのヤツが目を覚ました。

「え、あ、その、悪い。」

えーと、起こしちまつたか？」

「ううん……」

言ひながらこいつが起き上がりかけて　　がくりと手を付く。

「ムリすんなよ

「……うん。

けど、これだけ、やらなきゃ……」

大事な話らしくて、こんだけ身体が參つてゐるのに、ルーフェイアのヤツはやめようとした。

見かねて訊く。

「何なんだ？」

「あのね……通話口の通信網入れると、ある……？」

「通信網？」

なんていきなり、と思つてたら、訊くより早くこいつが説明してくれた。

「連絡、したいの……」

「だったら一階の、叔父さんが使えるぜ」「隣の診療室にもあることあるけど、あれは俺が登録されてねえから使えない。

「ありがとう、わかった……」

でもルーフェイアのやつ、やつぱ起き上がりれないらしい。これじゃ一階の部屋だとか、どうせたって三歩も進めねえだろ。

「明日じゃ、ダメなのか？」

「けど、きっと心配してる、から……」

そりゃそうだ。

行方不明のままってのと、居場所だけでも分かってるのと同じで、天と地以上の開きがある。

かとこつてこの調子じや、どうせつれてつたもんだか……。
少し考えて、俺はここにもちかけてみた。

「俺が、やつとこいつか？」

「……いいの？」

「いこぞ？」

町を十キロランニングしようと叫うわけじや、ねえし。

「せしたら……場所、書くから……」「……

どつかからか引っ張り出した紙切れに、ルーフェイアのやつが連絡先を書き付ける。

「ここの、おねがい……」

「オッケー。んで、なんて書きやいい？」

沈黙が降りた。

こいつの碧い瞳から、涙がこぼれる。

「えっと、おい、だいじょぶか?」

けど答えはなくて、もうひとつ涙が落ちた。

それからやつと、こいつが口を開く。

「ルーフェイア＝グレイスは無事、同行した兄さん……じゃない、ラヴェルは死亡。」

そう、おねがい

それだけ言って、ルーフェイアのやつが膝に顔をうずめる。

気持ちは、想像ついた。

俺も親父が死んだって聞かされた時は　田の前で見たわけじゃねえのに　こたえたなんてもんじゃ、なかつた。
ましてやこいつは兄貴を、たぶん田の前で亡くしてゐる。

「ルーフェイア、一人のほうが……いいか?」

親兄弟の間にや、他人は立ち入れない。学院でも独りにしといてくれつてヤツは、けっここういる。
けどこいつは、違うらしかつた。

「ううん、ここにいて……」

辛すぎて、独りじゃダメなんだろう。

その辺の椅子を引つ張ってきて、かける。

でも俺は、何も言わなかつた。こんなときにはタになんか言つても、傷つけちまうだけだ。

死んじまつたやつは、戻らねえから……。

それからどんどんぐらい経つたのか、やつとルーフェイアのやつが顔を上げた。

「なんか……ごめんね」

「気にはなって。俺もさ、親父死んだときはそうだったし。

軍人だから覚悟してたはずだつてのに、こぞそうなるとすぐーキツいんだよな」

答えながら立ち上がって、冷蔵庫を開ける。中には思つたとおり、薬と並んで幾つか缶ジュースが放り込まれてた。

「飲めよ」

放り投げる。

きれいな放物線を描いて缶が飛んで、上手いことルーフュイアの手の中に収まつた。

「ありがと……」

夜の診療室に、缶をあける音が響く。

俺も自分のぶんを出して、今度はベッドの脇に腰掛けた。

「これ飲んだら、寝るよ?」

「……うん」

そのあとほびっひも何にも言わなくて、ただ夜だけが過ぎてつた。

翌朝。

「おーい、起きられつか?」

俺は時間を見計らつて、診療室に声かけてみた。

「ん……?」

「あ、うん、大丈夫」

驚いたことに、ルーフュイアのやつが即座に目を覚ます。戦場で育つただつてだけあって、抜群に起きがいいらしい。

「シャワーでも浴びてこいよ。着替え、叔母さんがタベ出してつけてたし」

実は朝浴びに行って、始めて気が付いただけだったりするけど。そこまで用意しといて言い忘れる辺りが、さすがあの叔母さんらしい。

「いいの？」

「いいって」

別に、俺が水道代払うわけでもねーし。

「えっと……どこ?」「

「ひつちな

一階へこいつを連れてく。なんせこんち一階は診療室だから、生活スペースは全部一階と二階だ。

幸いルーフェイアのヤツは一晩寝たせいか、動けるようになつた。

「そこの廊下の奥な。終わったら、メシあるぜ」

「ほんとに?」

信じてねえし。

「ウソついてどうすんだよ。てか、先に行つてこつて
「あ、うん」

「こつを風呂場へ押し込んで、その間に急いでメシの最後の仕上げにかかる。

俺が言つたせいもあるんだろうが、ルーフェイアのヤツはなつこつ長湯だつた。

もつともシャワーなんてしばらぐぶりだろうから、気が済むまで浴びたい気持ちは分かる。おかげでこつせむ、慌ててやらずにすんでいい感じだ。

と、盛大な音が風呂場の方から響いた。

焦つて脱衣所へ飛び込む。貧血でも起つてしまつくり返つてたらヤバい。

「おい、だいじょぶか！」
「だ、だいじょぶ……」

幸い、こいつは何でもなかつたらしこ。脱衣カゴがひつくり返つて、服が散らばつてるだけだ。

「ちよつと……滑つちゃつて」

「まだ調子悪いんじやね？」

なんせ夕べの今朝だ。いくら寝たからつて、まるつまつ元通りになるわけもねえし。

「そう、なのかな……いやあつー」

「へ？」

タオルが飛んできた。

「やだつ、見ないでつ！」

「ああ」

やつと言つてゐる意味を理解する。
けどなあ。

もうバスタオル羽織つてつから、裸つてワケじやない。しかもついでに、そのバスタオルの下が……。

「ネ!!並みの幼児体型見せられてもなあ、別にビーナスことね……」

「！」

間髪入れずに力「がダブルで飛んできて、ビッちも俺の頭に豪快に命中した。思いつきり怒らせたらしい。

「ンな怒らな ちよ、待てつ！」

続けて来た蹴りをビーナスにかかわす。

「つかお前、タオル一枚で蹴りかますなつて！」

丸見えだつての。

「え？ あつ、やあああつ！」

だから自分でやつといて、悲鳴あげんなよ……。

「えーとその、ともかく服、着ろよな？ 僕、外にいつから」「うん……」

しゃがみこんだこいつが、半ベソでうなづく。強烈な蹴りとかシヤレにならねえけど、ユーユーとはなんか可愛い。外でしばらく待つてから、俺は声をかけた。

「もう平氣か？」

「うん」

答えを待つてから開ける。さすがにおんなじ」と繰り返してヒドい目に遭うのは、願い下げだった。

「ちつともすげえ音で、お前が倒れたと思つたんだよ」

「……ごめん」

着替えてる間に、こいつの頭も冷えたっぽい。

「ホントになんでもねえんだな？ どうかぶつけてねーだろな？」

『気持ち悪いとかねえよな？』

ぱつと見問題なわけだけど、念のために訊く。

「それは、だいじょぶ……ごめん」

「ならいいや、メシ食おうぜ。腹減ったし」

「ご飯つて……ホントに？」

また言われるし。

「ウソ言つて Bieber なんだって、ちつとも言つたり？」

「でも……」

まだ半信半疑のこいつを、食堂へ連れてぐ。

「す」い。料理……できるんだ

「その辺のモン、並べただけだぞ？」

いつたいこいつ、ビーガン生活してんだか。

なにせテーブルの上に並んでるのなんぞ、残ってた野菜のサラダ
とスープ、あとはトーストと田舎焼きとベーコンとミルクだけだ。
ちなみに叔父さんたちは、タバ駆り出されたつまりでまだ戻つて
ない。

「その辺、座れよ」

「うん」

思つてたよりかは元気になつてゐるこいつが、椅子にかけた。

「こんなちゃんとしたご飯……久しぶり」

「お前マジでメチャクチャな生活、してねえか？」

これが「ちゃんと」と「ひんじや、あとは推して知るべしつてやつ
だろう。

まあ戦争してちゃ、しょうがねえんだわいな……。

半分呆れながら、ともかく俺も座る。

「味付け、わからぬからほんとんびしてねえんだよ。その塩でも
なんでも取つて、自分で足してくれよな」

「うん、わかった」

ルーフェイアが食べ始める。

やつぱ可憐こよな、こいつ。

金の髪で海色の瞳した、どびつきりの美少女だ。だからメシ食つても、アンティーケ人形が動き出したみてえな雰囲気になる。なのにめつぽう強くて、けど纖細ですぐ泣いちゃって、でも平氣で炎の中へ飛び込んだじまつたり……。

「えつと……なに?」

「へ? あ」

メシ食つのお忘れ見てた。

「あたし……なにか、しちゃつた……?」

「してねえしてねえ。

それよりよ、その、えーと あ、そいつか、おふくろさんから連絡、来てたぜ?」

慌てて話題を変える。

「なんか、けつこーーの近くにこらして、書いてあった」

「ほんとに?」

「ああ」

ざつとしか見ちゃいねえけど、書いてあったことをひこに書つてやる。

「じゃあ、父さんも母さんも……無事だつたんだ」

「よかつたな」

ただでさえ兄貴が死んじまつたつてのに、そのつた「両親も」なんてことにならなくて、なによつてやつだ。

「居場所書いて返信しついたから、そのつたじ、来るんじやねえか?」

「母さんの性格じや、今日中に……来るかも」

言つ方からすると「二つの親、そういうの行動派らしー。

「まあいいや。ともかくメシ、食ひちまえよ」

「うん」

今度は俺も食べ始める。

俺の通つてる学院の話だのなんだのしながらメシ食つて
に違ひ話になつた。

最後

「お前さ、これからどうすんだ?」

「なんでンなこと訊いたかは、分からない。」

ルーフェイアのほうも、なんてことなしに答えた。

「しばらへば、休めると……想ひ」

「しばらへつて、そのあとはどうすんだよ?」

俺の質問に、ルーフェイアのやつが視線を落とす。
海色の瞳から、涙がひとつずじこぼれた。

「 やめちまえよ

俺が言つと、涙がわざわざこぼれる。

「 やなんだろ? だつたら、やめちまえつて」
けど答えの代わりに、ルーフェイアが首を振つた。

「 なんでだよ?」

「 だつて……」

あとは言葉にならない。ただ泣くだけだ。

「けじお前、ヤなんだろ？ ガツコ行きたいんだろ？
じゅあ、そう親に言えよ

「……だめ……」

呆れる。

ンなどこ頑固じやなくたって、構わねえだろ。けじ何度言つても、こいつは首を縦に振るうとはしなかつた。泣きながら、「だめ」の一点張りだ。

「お前、頭冷やせよ！」

今度はどつにかなつたって、次はねえかもしれねえだろ。「だつて、だつて……」

泣きじゅぐる。

「やめて……言わないで……」

泣きながら「お嬢われると、俺も弱い。

「その、だから、ともかく親に言つてみろよ。ちゃんと『イヤ

だつて』

「……」

セレぐ、呼び鈴の音が響いた。

「お、お嬢さん……？」

「お嬢つてなあ」

医者に来るのはお嬢じやなくて、患者だ。

もつともそれじや、困んだけど。

診でもらこに来る人に「帰れ」つづーのせ、ちよこ楽しくない。
もつかい呼び鈴が鳴った。

「どなたかいらっしゃいませんー？」

「すいません、いま開けるんで」

慌てて走つてつて、ドアを開ける。

「すいません、今ここ医者が……あれ、もしかしてルーフェイアの？」

ドアの外に立つてたのは、大人が一人。男と女だ。んで女人のほつが、髪とか瞳の色とか顔立ちなんかが、ルーフェイアと似てる。これはどう考えたつて、こいつの親父さんとおふくろさんだらう。

「じゃあ、あなたが連絡くれたのね？ ルーフェイアは今どこかしら？」

おふくろさん（たぶん）が、俺にいきなり訊いてくる。

それをルーフェイアの声がさえぎつた。

「かあさん！ いきなり質問攻めにしたら、ダメよ

「なんか、元気そうね」

「うん」

いつの間にやら涙も拭いちまつて、あの落ち込んだ様子なんざ微塵も感じさせない。

バカかよ。

あれだけ嫌がつてたつてのに、親の前じゃ知らん顔してる。

まあもしかしたら、親子つてのはこゆもんなのかもしれねえけど。ただなんせ俺、さつさと親父もおふくろもいなくなつちまつたら、そのあたりはよく知らなかつた。

ンな」と考えてる間にも、ちやつちやと話は進んでる。

「いまね、朝ご飯……食べさせてもらつてたの。

「その、太刀取つてくる」

ルーフェイアのヤツが、ひょいと奥へ引っ込む。

俺も思わず後を追つた。

「おい、ホントに行くのか？」

「うん。

迎えに来てくれたのに、待たせてられないから」

またか、そう思う。

どう見たつてこいつの本心は、そんなところには、ない。

「いいかげんにしろよ……お前、ホントはンなことには、思つてねえだろ！」

「でも！」

珍しく、ルーフェイアの口調が強くなつた。

「でも、これはあたしの、あたしの……！」

「だから、頭おかしいってんだよつ！」

だいたい、お前が学校

「だめつ！ それ言わな

「あんたたちやめなさいつ！」

もひとつかぶつた迫力の声に、思わず一人で黙る。

「まつたくもう、いきなりケンカなんて始めて。何考てるんだか」

「あー、すいません、つい」

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

一転して平謝りしだすの、こいつの属性か?

「ごめんなさい、すぐ、行くから……」

それをおふくろさんガ、止めた。

「ルーフェイア、やつぱりあなた、学校行きたいのね?」
まっすぐ見つめられて、ルーフェイアのやつがうつむく。

「どうなの?」

「ごめんなさい! ほんとに行こうなんて、思ってない……」

必死の表情。

なんでだ?

けど理由はこのときは、分かんかった。

「どうして言わなかつたの?」

「だつて、だつてあたし、この家に……」

俺に分からねえ話を、母娘が始める。

「たしかにそうね。でもだからって、行つたらいけないなんてこと、
ないのよ?」

瞬間、こいつの表情が変わった。

「なんで……?」

何かに裏切られた。そんな顔。

「どうして今、」
「そんなこと……」

いつもとは違う涙が、二つの瞳からこぼれる。

「みんな、だつてみんな、あたしは戦つためにこもつて！
だから、だからあたし……！」

親一人 特におふくろさん の表情が、曇つた。

「ぢりじり、ぢりじり……」

よつぽどのことなんだろう、抗議しつづけることを、おふくろさんが抱きとめる。

何も言わないのに、見てるのほつちのほうが辛かつた。

こいつの親は最初っから、知つてたんだろ？ ただなんか、理由があつて……。

「あのよ やつかも言つたけどや、学院、来るか？」

なんでもやつ言つたかは、自分でも分からない。

けどそれが、いちばんいいよつな気がした。

「お前、俺と同じ年だろ。なのにダチもないなんての、やつぱりうかしてるし。

あとなんかお前メチャクチャ強ええけど、やーかーのあやこは平気だしや」

話聞いて、おふくろさんが顔を上げる。

「あなたの学校？ でも普通のとこじや……」

「俺んとこ、M e S なんで」

おふくろさんが、はつとした表情になる。

「その手があつたわね……ああもう、あたしとしたりが、そんな

「とにかくええ氣づかないなんて」

なんかやたら傲慢な言い方だけビ、この人の場合それが当然に思えるからす」。

「それならやれるかもしないわね。普通の学校じゃないぶん、かえって楽かもしれないし」

「……そうだろうな」

初めて親父さんも、口を開いた。

「それに前線は、子供が居る場所じゃない」

「父さんまで、そんなこと言うの？！」

弾かれたみてえに、ルーフェイアが振り向く。

「そんなの、そんなのひどい……」

泣きじゃくる二つの細い身体を、おふくろさんがまた強く抱いた。

「いめんね。本当は分かつてたのよ。

でも、出来なかつた。それにMえSなんて思いいつかなかつた驚いた表情でルーフェイアのヤツがおふくろさんを見る。

「母さん……？」

辛いすれ違い。

ただ間違いないのは、どちらも相手のことを想つてたつてことだ。

「こりこりやつたけど、普通のところじゃダメだった。いつもあなたは、あたしたちの想像を超えて……」

良く似た碧い瞳が、こいつを見返した。

「さび彼の言つとおり、ああこいつこなうあなたでも大丈夫だと思う」「でも……」「…………」

まだ困惑するこいつに、両親がうなずいた。

「お前がそうしたいなら、行くといふ」

親父さんが答える。

「Meilleurたらやつぱりシエラかしら~ あそこの学院長は誰だつたかしらね」

おふくろさん、すげー強引。もうカンペキに行かせる氣でいる。正直こゆタイプの親から、どうやつてこゆ大人しい娘が生まれたんだか、かなり謎だ。

「シエラ学院ならつてことで上級傭兵になつとけば、箱もつべから一石二鳥だし。

そういうえばアヴァンシティにもあつたわよね」「俺が言つてゐるのつてそこじやなくて……」

まあ部外者にしてみりやいくつかある学院のどれも、一緒なんだろつけど。

「えーと、アヴァン分校じゃ上級傭兵、なれないですよ?」

「あり、そななの?」

説明書があるわけじやないから、一から説明する。

「あれ、本校の生徒だけなんですよ。

だから分校にいになりたいヤツは、わざわざ本校に転校するんです」

「同じ学院なのに、複雑なのねえ」

「俺に言われても

なんでそうなってるかなんぞ、知りやしねえし。

「で、あなたはどこの生徒なの？」

「今度はいきなり話が飛んできた。

「あれ、言つてませんでしたっけ？」

「聞いてないわよ」

あつさり切り返される。

けど良く考えてみりや、そのとおりだ。このペースに巻き込まれて忘れてたけど、この人と会ったの、ほんのちょい前だし。

「一応、本校ですけど」

「あら、そうなの？　じゃあそこでいいわね

いいのか？

なんかこの人、あんまりにもチキトーフーか……。

「そこで、って、あそこ親いると、なかなか入れないですよ？」

「あらま、じやあ学院長にでも掛け合わなきやだわね。あそこは学院長誰かしらねえ」

「オーバル学院長ですけど？」

「あら、やあね。オーバルって言つたら彼かしら？ 最近音沙汰ないと思つたら、そんなところでそんなことやってたなんて、まったくあたしに黙つてそんなことして。

でも彼なら話が早いわね。すぐ連絡入れなきや

会つたわけでもねーのに、うちの学院長を知り合ひの誰かだつて決め付けてるし。

てかとつとと話、進めちゃつてるし。

ルーフェイアのヤツも話に置いてかれて、さすがに抗議する。

「母さん、そんな勝手に……！」

けど、おふくろさんのほうが一枚くらい上手だ。

「あらあなた、行きたくないの？」

「それは……」

「じゃあ決まりね」

マジ、乱暴な人だし。

「でも、でも……」

「なーに躊躇つてんのよ。行きたかつたんでしょう？」
頭ごしごし撫でられて、やつとこいつがうなずいた。
それから、訊ねる。

「……父さんと母さんは、それでいいの……？」

「いいに決まってるでしょ」

おふくろさんは即答。親父さんの方も微笑してうなずく。
でもそれに、まだルーフェイアのヤツは食い下がった。

「だつて……もう、会えないかも……」

重い言葉。

確かにそうだ。戦地を渡り歩く傭兵は、いつ死ぬか分からぬ。

「いつの、兄貴みたいに。」

だけどおふくろさんも親父さんも、そんなこと気にしてなかつた。

「いいわよ。あたしたちがあなたが、幸せならいいんだから。
行きたいんでしょ？」

長い沈黙。

そしてルーフェイアのヤツが、顔を上げた。

「……行きたい。あたし、行きたいの。
ダメかもしれない　でも、行つてみたい！」

こんな風に「イツがいつの、もしかしたら生まれて初めてじゅね
えのか？」

なんとなく、そう思つた。

おふくろさんが嬉しそうにうなづく。

「決まりね。すぐ入学の手続きしてあげるわ。

ティアス、この子連れてちょっと、その辺散歩でもしてきてく

れない？」

おふくろさんがウインクして、ルーフェイアを親父さんに押し付けた。

二人が外へ出て行く。

それを見送りながらおふくろさん、背中向けたまま今度は俺に話しかける。

「こんなこと初対面の、しかも子供のあなたに、言ひ事じゃないんだろうけど」

さすがに力チンとくる。

どーせ俺はガキです。

と、ルーフェイアのおふくろさんが笑い出した。

「あらゴメンゴメン、悪気はないのよ。だつてあなた、子供なんだもの」

「子供で下さいませんね」

人の神経、わざと逆撫でしてんのか？

そんな俺に向かつて、お腹抱えて笑いながら、おふくろさんが言った。

「ほら、そんなに怒らないの。

だいいちね、あたしあの子の親よ？ だもの学校行つてる子なんて、みんなまとめてあたしの子供みたいなもんよ」

まあ確かにそうなんだけど、なんか釈然としねーんですけど。もつともこの人、そんなのに構う人じやないわけで。

と、おふくろさんが不意に哀しい表情になつた。

「ねえ、あの子の」と、守ってやつてくれる?」

「え?」

予想外すぎるセリフ。

おふくろさんの表情もあって、上手に言葉が出なくなる。

「……あいつ、俺より強いですよ?」

やつと言えたのはそれだけだ。

ウソ言つてるわけでもない。火事騒ぎの時だけ、あいつひとりでどうにかしたようなもんだし。

ただ、ホントの意味はなんとなく分かった。

あいつはめっぽう強いけど。

少しだけためらつてから、俺は訊いてみた。

「どうして、俺なんです?」

おふくろさんが不思議な、でも寂しい笑いで答える。

「あなたが初めてなのよ、あの子と本気でケンカしたのは」

そして一瞬、遠い瞳をした。

また言葉が繋がる。

「分かつたかも知れないけど、つむづつ複雑でね」

「そりゃ分かりますって」

ガキ連れて戦争行つてるだけでもどうかしてるつて気はするけど、

さつきの話はなんとなく、そんだけじゃない。

なんつーかいつ、もっと『テカイバツク』がありそうな……ンな雰囲

気だつた。

そしてあいつは当然、モロそこに巻き込まれてる。

おふくろさんがため息をついた。

「少しだけ……つまとのあの子の事、話すわ」

Caleana

かなり長く続いているうちに、ひとつの一言に伝えがある。
そしてそれは……あの子と関係があった。
ただの言い伝え。自分でも、そう思うのだけれど。
でもどうしても引っかかった。それも今になつて。

あの話には、後日談があると言われてる。

でも、そう言われているだけだった。内容は家に伝えられてる物
のどれを見ても、きれいに消されている。

誰が何の意図で消したのかは、分からぬ。けど徹底してるとこ
から見ても、その内容を伝えたくなかったのは分かる。

それが果たしてあの子を守るものなのか、それとも破滅へ追い込
むものなのか、それも分からぬ。

そんなものをなんで、いま急に気にするのか。自分でも理解でき
やしない。

なのに……何かがそうしんど、頭の奥から告げてた。
だから、この子に叫ぶ。

「あの子のこと 賴むわね?」

Imad

「すごい、ここが……シヒラ学院?」

船に揺られながら、ルーフェイアのヤツが呆然と見上げた。
行く先の島は濃い緑で覆われて、その間からそびえる尖塔が見え
る。およそMediterraneanという先入観とは、かけ離れてるってやつだ。

「けつこひ、大つきいだろ？」

「うん」

なんたつて、小さいたつて島が丸ごとだ。つか実地訓練用の場所まで入れたら、このチビ群島全部が学校だった。

俺らあああとアヴァンから海越えてコリアス国入って、そのあと列車に乗り継いで、ケンディクまで帰ってきた。

そのあとルーフェイアのヤツがいろいろ手続きだのあるつてことで、シヨラのケンディク分校でちつと足止めくらつたけど、今日許可が下りたとこだ。

つか学院長、本気でこいつのおふくろさん知り合いだつたらしい。

ホントなら親アリは審査で何ヶ月とか待たれるし、春までは分校生やるのが決まりだ。なのにこいつよっぽどなのか、速攻つて言つていい速さで、分校飛び越えて本校への入学許可出てたりする。たぶんあの複雑な事情を話したんだろうけど、それが言えるつてことは、かなり仲がいいんだろう。

逆に考へると、最初つからここに来てりやさつくり入学できたわけで、その意味じやルーフェイアのヤツはかなり運がない。

まあ、いまさらだけど。

「ここの本島に、寮と校舎あつてさ。実地訓練なんかは別の島でやるんだぜ」

「そりなんだ……」

その間にも船は進んで、船着場に着く。狭い場所に高速艇まで停泊させてるから、間縫つて接岸するのが大変だ。

綱が渡されて、船がしつかり繋がれる。

「気をつけるよ、時々落つっちゃるバカいつから」

「うん……」

揺れる足元を確かめながら、桟橋へと飛び降りる。切り立った崖の間の、坂道を登つてくと、いつもみてえに視界が開けた。

「きれい……」

ルーフェイアが声をあげる。

石造りなのに微妙な曲線が多い建物と、上手く配置された五つの塔。周りの木とか草花も専門の庭師 半分ボランティアのじっちゃんばつちゃん夫妻だ がきつちり手入れしてるから、絵に描いたみたいな調和ぶりだ。

じつさいけつ じつ評価も高いうしくて、年に何回か、庭の一般解放までされてる。

「……なんか、夢みたい」

ルーフェイアのヤツが立ち止まつた。

「でも、夢じゃない……よね？ あたし、ここに行けるんだよね？」

…？

不安げな表情で、じつちへ振り向く。

「夢なわけねえって。

おい、頼むからここ泣くんじゃねえぞ。おれが泣かしたと思われるかんな」「だいじょぶ……」

そしてこの後二人は、この学院で十年の歳月を重ねることになる。

あとがき

最後まで読んで下さって、本当にありがとうございます。

現在第3作「抱えきれぬ想い」を連載中です。リンクを貼つておきますので、読んでいただけたら嬉しいです。なお、毎日“夜7時”過ぎの更新です。

感想・評価大歓迎です。お気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6982d/>

憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

2011年2月6日13時11分発行